

●2010年生まれの子供の平均寿命は、100歳に達するのだとかー。17年時点での日本人の平均寿命は女87.26、男81.09…単純比較でも、それぞれ13歳弱、19歳弱伸びる計算です。AIの飛躍的進化もあり、**個体別の薬剤適合が日々進んでいる**実情を見れば、**生物年齢が早晚三桁に達するのは、不合理な話ではない**のかもしれませんが。問題は社会的年齢、とりわけ社会制度と生物年齢が異なり、齟齬が発生する点にあります。これまでも前例がなかった訳ではなく、社会制度において括られた「学年」と生年月日による個々の年齢が交錯したとき、同じ年次で最大1年の相違が生じるケースもありました。が、寿命の伸長は、その程度では済まない課題を突き付けてきます。例えば、社会福祉が行き届いていることで知られる**スウェーデン**。そのスウェーデンですら、定年は尚70歳。何れ日本が踏襲する筈の行程を、既に歩んでいる先行指標の様な国ですが、それにしてもこの先、**定年後の人生が30年もある**訳です。●それを視野に置いたとき、昨年10月1日の国勢調査を基に総務省統計局が弾き出した**人口減少=対前年同月比で23万人減(2018.01.01現在)**=という現実、日々の暮らしに追われるごく普通の市民の「子を産み、育てる環境がどこにあるのか？5年先も見通せないこの時代に敢えて子を産み落とし、100年も生きなければならぬ人生を送らせて良いのか？」という、無言の抵抗を示す意思表示であり、それは又この先、私共を待ち受ける暗い影を予感させる**見過ごしにできない予兆**であるとも云えます。●その意味では、一見、何の脈絡もないかのように見える、今年4月30日の日経朝刊に載った次の様な見出しも、垣間見えた未来の縮図の一つかも知れません。「**イノシシ新捕物帳 出没検知→わな駆除4倍**」…この短いヘッドラインには、この国の現状と近未来の姿が凝縮されていると思われるからです。記事の舞台は長崎の五島市ですが、センサーや通信等の先端技術を用い、農作物の鳥獣被害を抑える実験場として偶々選ばれたに過ぎず、実際には全国至る所で、国や自治体の予算を蝕む要因となっている共通の問題なのです。人手が揃っていた頃は、勢子が追い込んで狩る方法で足りましたが、今は罠を仕掛ける専門家も少なく、猟友会のメンバーも減る一方。適切な間伐も行われぬ為、山の木々は実りも少なく動物達の餌も不足する。一方、ケモノ道に迄進出し、生息域に隣接する人間の集落には、豊富な食糧=田畑=があり、夜ともなれば管理する者も居らず、ハンターもいない…●処で、対前年同月比で23万人減という数値は、**外国人を併せた日本の総人口の減少**を表したものであり、**日本人の減少数だけを見ると、実に36万6千人にも達**しています。日本人の減少に辛うじて歯止めを掛けているのが外国人-という構図は、これから益々顕著になって行く事でしょう。今後の日本が、この様な事態をどう受け入れ、どう制度化してゆくのか判りませんが、保険や年金という社会保障にも大きく影響するのは間違いありません。それに加えて、**深刻さを加速させているのが、この四半世紀で年300万人から240万人に急減している25歳未満の若年層**です。統計上は今の処、15歳から64歳までの生産年齢人口数の減少=56.8万人=と65歳上人口の増加=59.8万人=はほぼ均衡状態にあって、定年制度や継続雇用制度の延長見直し等の調整で賄える範囲に置かれている状態ですが、次々世代の代替わりが戻す筈になってゆく以上、到底楽観する事は出来ません。●だとすれば、**業界の横並び意識や出る杭は打たれる感覚は、足枷と化す恐れがあり、たとえ半歩でも先を歩む為には、人材の採用に止まらず、育成・活用段階に迄視野を広め、戦略として意識すべき頃合**ではないかと思われるのですがー。